

北支那

独立歩兵大隊の戦闘

宮城県 高橋 康 治

大正十一（一九二二）年九月、宮城県桃生郡の草深い貧農の長男として姉と妹二人の真ん中に生をうけ、父は私が小学校二年の時に早世し、か細い母の手一つで育てられました。尋常高等小学校を卒業後、冬は土木工事、夏は大農家の日雇いとして家計を助ける傍ら、生計には無頓着で青年団並びに青年学校の活動に専念しました。

これらが認められて皇紀二千六百年の記念式典の御親閲の分列行進に参加する代表に選ばれました。

また翌昭和十七（一九四二）年四月には青年学校卒業にあたり宮城県知事賞を受ける等があり、理解ある母の思いやりに感謝の念がいっぱいです。

思い起こせば昭和十七年十二月一日、新潟県高田市

の歩兵第三十連隊に現役入隊以来、内務班の勝手も分からなのまま北支派遣のため十一日原隊を出発、門司港より輸送船に乗りました。甲板に独り佇み、吹く海風と共に去り行く祖国よ榮えあれと、再び戻ることのないであろう日本に別れを告げたあの日の光景が、現在でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

感傷いまださめやらぬ間に釜山港に上陸、大陸縦走の列車の人となり、十二月二十日頃、北支山西省の崞県（太原と大同の間）に駐屯する独立混成第三旅団（造）に到着、列車の旅を終えました。ここからは軍用トラックに分乗、それぞれの任地に向け出発、終着地の大宮鎮の第六大隊第一中隊（中隊長小林大尉）に到着、十日間の旅装を解きました。

間もなく異国での初めての正月を迎え、大盤振る舞いに大満足したのも三日間だけのお客様扱いでした。

一期の検閲が終わるまでの厳しい演習と、内務班の厳格な規律ある生活に目の回るような日常に体罰が加わり、日増しに軍人らしく成長し、小銃での一期の検

聞が終了しました。次は特業教育が始まり、私は歩兵砲要員なので、集合教育のため八人の一員として繁崎にある大隊本部の教育宿舎に入りました。そこで各中隊から参集した三十二人と共に起居を同じくした教育が開始され、寄り合い世帯なので演習は熾烈を極めたものでした。

重い大砲二門の分解搬送競争で負けた方は更にもう一度やらせられました。腹が減って仕方がなく、不寝番に立った時には我慢できず、翌朝、馬に与える大豆を大釜で煮たものを少しぐらいはと摘み食う者がいました。朝になって教育助手に見つかり「食った者は誰だ！」と言われても誰も答えない。助手の感情がだんだんエスカレートしてくる。仕方なく二人で申し出たら、水に濡らしたスリッパで叩かれましたがあまり痛くなかった。

助手は私共が犯人でないことを見通しての制裁だったのです。そのうえで全員の朝食全部を馬に与えて朝食抜きの演習は一段と気合いが入り、昼が待ち遠しく、二度と繰り返されないと暗に誓い合いました。

教育の後半の四月初旬、部隊の討伐行に初めて参加しました。

敵は大行山脈に盤踞する共産八路军です。峻険な山岳地帯の強行軍と厳しい内務班の務めに疲れ果て、苦し紛れに小銃の音がすると手を挙げて当たれよがしの行動をする者も出るようになりました。負傷した方が楽になれると思ひこむようになるのです。

ある朝、宿営した部落を出発し山に登り始めたら、背後の山からチェコ銃の猛射を浴びせられました。

「歩兵砲発射準備！」の命が下り、直ちに段々畑の石垣に砲の揺架を据え「準備よし！」、三・四番砲手が目標に眼鏡を向け「照準よし！」、弾を込め「撃て！」の号令に発射したら一発で鎮圧しました。この初陣の実戦において隊長よりお誉めに預かり自信を得ました。

続いて敵を追撃するため峻険を登っているうち、急カーブで馬に積載していた砲の揺架が右側の崖に接触したのと同時に、前の馬の尻が邪魔で進めず、耐え切れずにアツという間に数十メートル下の谷底に転落し

てしまった。馬は前足をバタつかせるのみで立てず、かわいそうですが班長が眉間に一発とどめを刺し、皆で花藤号（馬の名前）に合掌し別れました。

搖架は力自慢の同年兵山下が軽々と担ぎ坂を登り、どうやら戦列に追い付きましたが、先刻のお誉めがフイになったひとこまでした。

この討伐の途中で川辺村とかいう部落で大変豪華な建物が目に止まりました。

聞くところによると山西省の主である閻錫山の別荘と分かり、有名な五台山周辺の討伐と判明しました。

間もなく討伐も終わり、いろいろな実戦を積み、教育隊に帰りました。程なく歩兵砲の検閲も無事済み、教育隊は解散となり思い出の地を離れ、それぞれ各中隊に帰隊しました。間もなく昭和十八年四月末から北支軍の十八春太行作戦が始まり、本部直轄要員で連隊砲隊の一員としての命が下りました。

経験が無いので心配でした。早速出発、崞県駅より列車で新絳駅まで南下、その後は毎日毎日山岳地帯が

果てしなく続く大行山脈を強行軍の連続でした。

ある時は水筒の水も枯れ果てての行軍中、夜目にも白き湖の辺りに差しかかった時、運良く休止となり、これ幸いと一斉に飲むやら水筒にいっぱい詰めるやら、それでも行進する気配もなく夜明けとなったらその湖ではカエルの大合唱に眠気も覚めてしまいました。そしてよく見れば岸边にはオタマジャクンが浮いているのを見て大騒ぎとなりました。

やがて出発となり、しばらくして目的地白雲山を挟んで東姚集と対峙して陣地の構築を済ませ命を待ちました。

我々の任務は歩兵の白雲山への突撃路の破壊にあたり、一分間で三発、それを六分間発射という命令により一斉に砲火を浴びせました。

砲煙の中、山上の陣地廟を目がけて登る歩兵の突撃が手に取る如く見え、そのうち目の丸が頂上にヒラヒラとはためきました。

東姚集の八路军はそれを見て形勢不利と見たか離散

し、かくして作戦終結、原隊に帰着しました。

暫く警備に専念して居った九月十八秋葉西（才号）作戦出動の命が下りました。

峻険地帯を夜を日に次いで強行軍、程なく敵の根拠地周辺に辿り着くと、既に敵影なく作戦終結となる。帰隊後間もなく、我が第一中隊は全員転属の命をうけ、大宮鎮を撤退し、列車にて新任地の汾陽に到着、独立歩兵第三旅団第一九九大隊（神田）第一中隊となり、附近の警備に当っております。十九年九月頃、本隊が管内の齋正討伐に出た留守中に、川向かいの自警団の望樓が敵の襲撃を受け占領されそうなので、「救援頼む」の急報がありました。そこで残留兵員約一個小隊を私の中隊長須郷少尉が指揮を執り、川を舟で渡り、幅広い軍公路の両側の溝を進み、二〇〇メートルくらいに近付いた所で、中隊長が命令を下すため道路に駆け上がった瞬間、銃声一発がありました。中隊長が宙返りうって倒れました。私は危険を顧みず咄嗟に道路に上がり中隊長を引きずり降ろしました。

幸いにも私は狙われなく済みました。夜を待ち部落から戸板を求め中隊長を乗せて担ぎ、川を渡りようやく本部の医務室にたどり着き、ローソンの下で腹部の大手術を行い病状が順調に回復し動かせる状態になった頃、臨汾野戦病院に移送されました。私は須郷中隊長の当番を命ぜられ、同行し日夜介護に当りました。幸い中隊長の腹部貫通銃創でしたが、急所を外れていたので順調に回復しました。私も十二月一日を以って兵長に進級し、報告しましたら中隊長は非常に喜んで頂きました。十二月末頃になって良好に快癒したので内地の病院に送還になりました。私も河津の中隊に帰りました。

中隊長の後任は宍岐之島出身の目良中尉になりました。

昭和二十年一月頃になると再び転属となり、近くの河津第一一四師団第八十四旅団独立歩兵第三八三大隊（鍵沢少佐）第一中隊となりました。

中隊は付近地域の宣撫や治安維持が任務でした。黄

河のはとりの免門口の分遣隊のトーチカで、山砲一門と重機一挺で警戒に当たりましたが、ノミに苦しめられた思い出が忘れられません。

平穩な毎日を送っていた昭和二十年六月一日付で下士勤務兵長に進級、責任の重さを感じていました。八月二十日、中隊長から日本の敗戦を知らされ、負けていないのになぜ終戦かと怒りがこみ上げてきました。無念やるかたないの想いがいっぱいでした。

それから毎日、敵兵の遠くからの監視の下に兵舎の整理清掃をし、やがて大原近郊の楡次を集結のため使われなくなった鉄道線路の上を野宿をしながら、そして雨の日も強行軍でした。途中あごを出す者も続出し、中には手榴弾をくれと言う者も出る等まさに生き地獄でした。苦難の中を戦友同志助け合って漸く集結地楡次の街に到着しました。

早速広場において武装解除をされましたが、十月になると奥地からの引揚列車の警備に駆り出され、いったん返納した武器が再び貸与されました。

昭和二十一年六月になると、ようやく故国に帰るため天津に向け出発し、大沽港からアメリカの上陸用舟艇に乗せられ山口県仙崎港に上陸、二度と踏まない覚悟だった本土に帰りました。

昭和二十一年六月十九日、伍長に任官。検疫を受け感慨無量なるものがありました。

三年六カ月の間、果たし得なかった夢を今後の生活の中に活かし、大陸に散った亡き戦友の分まで頑張らなければとお互に誓い合い、夫々の故郷に別れを告げて立ち去りました。

留守宅は全員無事でした。家業の農業も農地解放で小規模ながら自作六町歩、受託七町歩と、徐々に面積を拡大し息子の経営努力により計十三町歩となり、大型機械を購入し米専門に耕作しています。

減反三〇%の時代に即応して転作組合が結成され、麦・豆・タマネギ等の耕作を部落の皆さんから委託され、合計三十五町歩程の転作に成功、従事しています。

復員後、昭和二十二年に結婚し、二男一女の父とな

り、息子も農家一筋に専念しております。

【解説】

体験記執筆者、高橋氏は北支那方面軍第一軍の独立混成第三旅団・独立歩兵第六大隊第一中隊に、歩兵第三十連隊（新潟県高田市）より転属入隊した。独立混成旅団・独立歩兵大隊について知る人も少ないので、高橋氏の所屬した、独立混成第三旅団及び独立歩兵第六大隊の部隊略歴を次に記し、解説に代える。

独立混成第三旅団司令部部隊略歴

〔編成完結の状況〕

昭和十三年三月二十七日軍令陸甲第九号に依り北京四苑において編成完結し、北支那方面軍の戦闘序列に入らしめらる。その編成左のごとし

旅団長 陸軍少将 佐々木到一

旅団司令部・独立歩兵第六乃至第一〇大隊（五大隊）砲兵隊（野砲一中、山砲二中）・工兵隊（一中）・通信隊（一中）

〔行動の概要〕

編成完結後北京において訓練及び装備の充実を図りたる後第一軍の戦闘序列に入らしめられ京漢沿線（石家荘―彰徳間）警備のため

昭和十三年

四月七日 北京出發同地区に南下せり。旅団司令部は順徳に位置し各大隊はそれぞれ鉄道沿線主要県域に分駐し周辺の警備に任せり

昭和十四年

一月 第一軍の作戦地域を山西省内に変更せられたるに伴い旅団は北部山西省（内長城以南―太原含まず以北）の警備を命ぜられる

十三日 移駐を開始、北京、大同を経る

二月上旬 これを完了せり、旅団司令部は崞県に位置し各大隊はそれぞれ県域に駐屯し、以後終戦に至る迄同地区に在り

昭和二十年

八月 終戦後武装解除せられたる後、引続き同地区に在りて現地自活の方途を講じつつ専ら復員

準備を進めありて

昭和二十一年

四月十八日 以降、逐次復員輸送を開始し北京、

天津を經る

五月二十三日 仙崎に上陸（一部は佐世保、博

多）し、復員せり

六月四日 復員完結

独立歩兵第六大隊 部隊長 大尉 佐々木義巳

〔編成完結の状況〕

昭和十三年

三月二十七日 昭和十三年独立混成第二乃至第五

旅団編成要領に基づき第五師団及び満州独立守

備隊、支那駐屯歩兵連隊より差し出されたる編

成要員を以て、北京郊外西苑においてその編成

を完結す

〔作戦の概要〕

四月 編成完結後、河北省順徳付近に移動準備を

なし順徳付近に移駐、該地付近の鉄道警備を第

十六師団より継承し肅正警備に任ず

昭和十四年

一月 北部山西省の治安肅生を命ぜられ、該地警

備を第十四師団に引継ぎ

二十三日 山西省葉峙県に移駐、第九師団

より同地付近の治安肅正の任務を継承し、以後

該任務を継続中

昭和二十年

八月十四日 停戦下令により任務を解き引続き同

地に駐屯

昭和二十一年

四月 部隊を山西省に集結、以後列車輸送により

太原―石門―豈台は天津を經る

五月七日 塘沽出帆

次に、昭和十九年九月再転属の第一百四師団、歩兵

第八十四旅団、独立歩兵第三八三大隊の部隊略歴を次

に記す

独立歩兵第三百八十三大隊（將第一五〇六部隊）

部隊長 陸軍少佐 鍵沢 太郎

昭和十九年

八月一日 臨時編成下令、昭和十九年軍令陸甲第

七十九号に依る

編成担任官 独立歩兵第九十九大隊長

陸軍中佐 神田泰之助

編成地 山西省平遙県平遙

集結兵力 造・国・豊・勝・将・北支那野戦貨

物廠輜重第一連隊、電信第九連隊

北京兵事部臨汾陸軍病院

八月十日 編成完結

〔行動概要〕

八月十六日 新警備地移駐のため徒步行軍により

平遙出發

八月二十日 山西省河津県河津省

二十五日 前任部隊独立歩兵第一一八大隊警

備交代以後同地付近の警備

大隊本部 河津（河津県）

第一中隊（長 陸軍中尉 三浦耕治）

第二中隊（長 陸軍中尉 須郷正次）

第三中隊（長 陸軍中尉 笠井長晴）

第四中隊（長 陸軍中尉 後藤久寿）

第五中隊（長 陸軍中尉 安東善男）

機関銃中隊（同 渡辺 章）

歩兵砲中隊（同 吉田 清）

九月三十日十月二日 第一次汾北作戦に参加

十月二十七日十一月八日 第二次汾北作戦に参加

昭和二十年

二月二十二日二月二十七日 第一次汾南作戦に参

加

九月一日

馬場少尉以下一〇三人現地除隊並に召集解除

三月十日 昭和二十年軍令陸甲第十八号により編

成改正（第十五中隊をそれぞれ第十三独立警備

隊及び第十二独立警備隊に転出、部隊内にて新

設二中隊を編成す

八月十六日 第三、五中隊郷寧県西波村及北桑峪

出發

十八日 復員下令

十九日 部隊転進のため河津出發

二十一日 候馬鎮（曲沃県）到着

二十八日 山西省臨汾県臨汾着

九月二日 停戦協定締結

二十日 臨汾出發（徒步行軍により）

十月一日 山西省榆次県榆次着、同地付近警備

終戦時、大・中隊の位置

本部歩兵砲中隊 河津

第一中隊 河津

第二中隊 翟店鎮

第三中隊 西波村

第四中隊 稷山

第五中隊 北桑谷

機関銃中隊 神前村

終戦榆次集結後、大・中隊位置

本部第三中隊・第五中隊・

機関銃中隊・歩兵砲中隊 榆次

第一中隊 飯延

第二中隊 東趙

第三中隊 北合流

（石太線沿線）

昭和二十一年

二月十五日 炭鉱労働者として秋葉伍長以下九人

榆次出發

三月二十日 藤岡中尉以下一五二人現地除隊召集

解除

四月六日 遺骨遺留品内地送還のため出發護送員

鹿野軍曹以下八人

九日 大隊集結のため第一・二・四中隊、榆

次に集結す

十六日 一部復員のため三浦中尉以下一二五

人榆次出發

〔主力復員状況〕

五月二日 主力復員のため鍵沢少佐以下四六五人

楡次出発

五日 天津着

十日 内地帰還のため鍵沢少佐以下四六二人

塘沽出帆

十七日 仙崎港上陸復員式挙行 復員実施